イナズマイレブン　驚愕の学園都市

sena

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
イナズマイレブン　驚愕の学園都市

【Ｎコード】
Ｎ６８００Ｍ

【作者名】
ｓｅｎａ

【あらすじ】
円堂達雷門イレブンが学園都市！！
超能力と超次元サッカーが新たな伝説が始まる

学園都市への出発

エイリア学園との死闘を終えて風丸達をエイリア石の呪縛から解き放ち、日本と仲間達を救った円堂守、

そしてともに戦った雷門イレブン達

彼らの戦いは終わっていなかった

＝雷門中＝

円堂「ほっほっ」

練習している円堂

円堂「・・風丸達早く治らないのかな」

研崎にダークエンペラーズされていた風丸達はしばらくエイリア石の影響がないか病院で検査入院しているところであった

豪炎寺「仕方ないさ円堂」

鬼道「それに次のフットボールフロンティアにむけているメンバーだけでも」

円堂「豪炎寺、鬼道」

壁山「でもメンバーは少ないッスよ」

そう現在の雷門イレブンは円堂　豪炎寺　鬼道　一之瀬　土門　壁

山　ついでに目金ふくめた七人

目金「ついでとは何ですか僕も雷門イレブンの一員ですよ！」

一之瀬「まあまあ、でもしかたないさ」

土門「こんな時に今度は本物の宇宙人きたらどうする」

鬼道「おいおい冗談はよせ土門」

円堂「宇宙人なんているわけ・・・」

秋「円堂く～ん！！」

その時マネージャーの木野秋がやってきた

円堂「どうしたアキ！？」

春菜「どうしたもありませんよキャプテン！！」

同じくマネージャーのひとりで鬼道の実の妹の音無春菜

鬼道「どうした？春菜」

春菜「夏美さんが皆を呼んでるですよ」

円堂「夏美がが！？」

＝理事長室＝

夏美「大変な時に呼び出してごめんなさい」

彼女もマネージャーの一人で理事長の娘の雷門夏美である

円堂「一体なんなんだ夏美」

理事長「それは私から話そう」

円堂「理事長！？」

理事長「皆は学園都市をしってるかな？」

円堂「学園都市！？」

壁山「一体なんなんッスかそれ」

鬼道「学園都市聞いたことがあるたしか名十もの大学や高校や小中学校がある学校の街だ」

円堂「学校の街？」

鬼道「そこでは超能力を開発するところでもある」

一同「超能力！？」

土門「マジかよ・・」

一之瀬「ＳＦだけの話だっと思ってたけど本当にあるなんて」

理事長「その学園都市にエイリア石らしきな物が運ばれたと鬼瓦刑事の情報だ」

円堂「エイリア石が！？」

鬼道「研究所の爆発で全部無くなった思ってたが・・」

理事長「そこで君達に学園都市にいって調査してほしいだ」

豪炎寺「ですが理事長、まだ風丸達は検査入院中ですよ！！」

理事長「心配は要らない吹雪君達にも協力してもらう」

円堂「吹雪達に会えるんですか！！　わかりました」

理事長「うん」

翌日

吹雪「やあキャプテン久しぶり」

円堂「吹雪！！」

塔子「よう円堂久しぶり」

円堂「塔子！！」

立向居「円堂さん！！お久しぶりです！！」

円堂「立向居！！」

綱海「よう円堂」

円堂「綱海も！！」

リカ「ダ～リン会いたかったで！！」

一之瀬「は、はは・・」

壁山「あれ木暮君は・・」

ばっ

壁山の顔にカエルがくついた

壁山「ぎゃー！！」

木暮「ウシシシ～」

春菜「木暮君！！」

円堂「リカに木暮も」

吹雪「話は響木監督から聞いた」

塔子「まだエイリア石があるんだろ」

立向居「俺達も協力しますよ」

円堂「みんな～！！」

響木「俺もいることを忘れるなよ」

円堂「響木監督！！」

円堂「よーしみんな学園都市にいくぞー！！」

おー！！

つづく

新たなる脅威

御坂「合同捜査!?」

黒子「はい、そうですのお姉さま」

とあるファミレスで御坂美琴と後輩でありジャッジメントの白井黒子が話していた

御坂「その連続襲撃事件の犯人の目星はついてるの黒子?」

黒子「それがまったく検討が付きませんの、それに不可思議ますの犯行の凶器が」

御坂「不可思議!?どんな凶器使ったのよ犯人は」

黒子「それが、”サッカーボール”ですの」

御坂「サッカーボール!?・・」

初春「はい!サッカーボールです」

佐天「なんでサッカーボールなんだろう!?」

同じく御坂達と一緒にいるのは佐天涙子と佐天と同じ学校でありジャッジメントの初春飾利である

この学園都市で数週間前から謎の襲撃事件が起きていた、予告も無く時間も関係なしで建物に襲撃が

起きていた、残念ながら犯人の姿も無く現場には犯行に使われボロボロにサッカーボールが残っていただけだった。

御坂「ところで何所と合同捜査するわけ黒子」

黒子「それが・・学園都市の外部からと合同捜査する事になったのです」

御坂「外から!?」

佐天「それって何所のだれですか」

黒子「たしか・・・ら・・らい」

初春「雷門中サッカー部です」

御坂&佐天「雷門中サッカー部〜!?」

御坂「ってナニ!?」

初春「雷門中サッカー部は中学サッカー界の日本一を決める大会フットボールフロンティアで今年優勝したチーム、それにあの日本全国の中学校を襲ったエイリア学園に勝ったチームなんですよ」

御坂「でも何でそんなサッカーチームと合同捜査なワケ!?」

初春「何でもエイリア石とか言うが絡んでるって言ってました」

佐天「エイリア石!?何それ」

黒子「それは雷門中の方々から聞くことになってますの」

御坂「それで黒子、その雷門中は何時くるの」

黒子「たしか今日の四時ごろには第七学区に着く予定ですの」

佐天「じゃ、その雷門中を見に行きましょ」

初春「さ、佐天さん!?」

そして御坂達は雷門中を見に行くことにした・・

佐天「みんな早く早く」

初春「待ってください佐天さん・・・」

とその時!

ビシューン・・・・ドゴーン!!!

佐天の隣を物体が建物の壁を破壊

佐天「え？・・・え！？」

初春「佐天さん！！大丈夫ですか！？」

佐天「だ、大丈夫・・」

すると・・

シュン、シュン　シュン　シュン　シュン

突然、御坂達の前に１１人の黒ローブの集団が現れた

黒子「いっ　何時の間に！？」

黒子も驚きだった

御坂「あんた達が襲撃事件の犯人ね！！」

？？？「・・・・・」

御坂「あくまでだんまりってワケねだったら・・・」

御坂「これで喋らしてあげるは！！」

御坂は手から電撃を放った

???「ワームホール！」

御坂「えっ！？そんな」

黒ローブの一人はみような穴を作り、御坂の電撃が穴に吸い込まれそして

ビシャーン！！

黒ローブの右上から穴が現れて御坂の電撃が落ちてきた

御坂「私の電撃が防がれた！？」

黒子「お姉さま、ここは私にあまかせですの」

黒子は隠していた矢を投げてそれを自らのテレポートで黒ローブの近くに出現させた

???「ヘビーベイビー！！」

別の黒ローブが重力波を放ち矢を沈めた

黒子「私の矢が・・・！！」

すると別の黒ローブが御坂達にボールを蹴ろうしていた

そのころ円堂は・・・

円堂「ここが学園都市かスゲー」

壁山「すごいッス、トイレ行きたくなるッス」

鬼道「？円堂、あれを見ろ」

円堂「！！」

それは御坂達がやられてるところだった

御坂「・・・・私達の攻撃が効かない！？」

黒子「・・・どうなってます！？、私やお姉さまより力が違いすぎますの！！」

初春「あのレベル４の白井さんが」

佐天「学園都市のレベル５の一人の美坂さんまで」

？？？「フッ」

ドシューン！！

とっ別の黒ローブが御坂達に強烈なシュートを放った

４人「キャー！！」

バシーン！！

御坂「・・・ん、あれ！？」

御坂達の目の前には一人の少年がたっていた

その少年は黒ローブの強烈なシュートを受け止めた

「大丈夫か！？」

初春「は、はい！大丈夫です！！」

御坂「アンタ一体誰」

「俺の名前は　”円堂守”雷門中サッカー部のキャプテンだ！！」

４人「雷門中サッカー部のキャプテン！？」

続く

禁断の技再び

御坂「雷門中のキャプテン、あんたが・・」

鬼道「円堂！」

円堂「みんな！」

???「・・・着かた待ちわびたぞ雷門イレブン！！」

円堂「まさか・・・」

???「我はチームゼロ！！　そしてキャプテンのナンバー11だ」

豪炎寺「チームゼロ・・」

ナンバー11「勝負だ雷門イレブン」

円堂「勝負だと・・」

ナンバー11「場所はここ、第七学区の競技場で待ってるぞ・・・フフ」

シュン

一瞬でチームゼロが消えた

円堂「よしみんな！！行くぞ」

御坂「ちょっと待った！！」

円堂「ん？」

御坂「何勝手に進めてんのよ！」

円堂「あ、ワリィ怪我はないか」

初春「はい、大丈夫です」

黒子「そうですの、それにあなた方であの連中に勝てると思ってますの！？」

円堂「やってみなきゃわからないだろそれに、勝利の女神がどっち微笑むなんてわからないだろ！」

円堂「そういえばまだ名前聞いて無かったな」

佐天「私は、佐天涙子です」

初春「私、初春飾利です、ジャッジメントです」

黒子「私、白井黒子と申しますの私もジャッジメント」

御坂「御坂美琴よ、ところであんた達」

円堂「ん？」

円堂「そういえばどこにあるんだ？」

御坂「わかったは、私達が案内するから」

円堂「本当か、ありがとう！！」

御坂達の案内でイナズマキャラバンは競技場についた

ナンバー11「着たか・・」

円堂「みんな、行くぞ！！」

おおー！！

角馬「お待たせしましたー！！、今日はここ学園都市第七学区の競技場から雷門中対チームゼロの試合を始まります」

黒子「ぬおお！？　誰ですのあなた！？」

黒子たちもびっくり

角馬「小生、雷門中の将棋部の角馬圭太　角馬とお呼びください」

彼は角馬圭太、雷門中将棋部に所属、雷門イレブンの試合の実況解説に全力を注ぐ男

初春「そういえば、あの人キャラバンに乗ってましたけ？」

角馬「さーいよいよ試合開始です」

ピー

雷門のボールから試合開始

雷門イレブンが一気に敵陣地に突入

角馬「さー豪炎寺がシュートにはいる」

豪炎寺はボールを高く上げ回転しながらジャンプ

豪炎寺「ファイヤートルネード！！」

ボールが炎をまといシュート

御坂「何、アレ！？」

黒子「何ですのアレ！！！？？」

御坂達も唖然

アキ「あれが豪炎寺くんの必殺技のファイヤートルネード」

初春「必殺技・・」

佐天「ウソ！？・・・」

ナンバー１「ワームホール」

だがナンバー１のワームホールは豪炎寺のファイヤートルネードに打ち消され

ピピー

角馬「ゴール雷門先制！！」

円堂「いいぞ豪炎寺！！」

豪炎寺「よし！」

そしてボールはチームゼロに

角馬「さー今度はチームゼロの反撃だ」

ナンバー１１「アストロブレイク！！」

円堂「くるかそれなら！！」

円堂は足を大きいあげて

円堂「正義の鉄拳！！」

すると回転する巨大な拳はロケットパンチのようにボールにとんでボールを弾き飛ばした

佐天「今度は何」

初春「巨大な拳が・・」

アキ「あれは円堂くんのお爺さんが残した究極奥義の一つ正義の鉄拳」

４人「究極奥義」

角馬「さー前半戦も半分になりました」

ナンバー１１「アレを使うか・・」

するとゴール目前、ナンバー１１は指笛を吹いた

ピューン

後ろから赤色の５匹のペンギンが地面から現れそして飛んで

シュート体制のナンバー１１の足に噛み付きそして

ナンバー11「皇帝ペンギン1号！！」

鬼道「何！？皇帝ペンギン一号だと！！」

角馬「強烈なシュートが雷門ゴールを襲う」

円堂「しかも早い！！」

円堂「正義の鉄拳！！」

だが

円堂「うわー」

角馬「ゴール！！円堂の正義の鉄拳が破られた」

佐天「究極奥義が破られた！！」

初春「そんな・・」

アキ「大丈夫、究極奥義には完成なしよ」

黒子「どうゆうワケですの完成なして」

アキ「究極奥義はつねに進化してるのだから完成しないの」

御坂「つねに進化している・・」

鬼道「円堂、大丈夫か！」

円堂「ああ、大丈夫だ・・うっ」

土門「でもなんであいつらが皇帝ペンギン一号を」

鬼道「しかも打ってもなんとも無いなんて」

角馬「さー今度は雷門が上がってきます、前半戦も残りわずか」

鬼道「一之瀬！」

一之瀬「おう」

鬼道はボールを上に上げそのボールを一之瀬がヘディングで下の鬼道に返して鬼道はそのボールをシュートした

鬼道＆一之瀬「ツインブースト！！」

角馬「鬼道と一之瀬のツインブースト、これはどうだ！？」

ナンバー1「ビーストファング！！」

ナンバー1は腕をまるで獣の口のようなポーズとって

ボールがきたら獣の牙が噛むようにボールを防いだ

角馬「キーパー止めました！！」

ピッ、ピー

角馬「ここで前半戦終了！！」

鬼道「まさか今度はビーストファングまで・・」

続く

常盤台の超電磁砲（前書き）

すごく遅くなってすいません

常盤台の超電磁砲

ハーフタイム

鬼道「しかしなぜやつらが皇帝ペンギン1号とビーストファングを使えるだ」

円堂「たしかになぜなんだろうな」

御坂「アンタ達あの技ことしってるみたいけど、一体なんなの？」

鬼道「・・・」

円堂「鬼道」

鬼道が口を開いた

鬼道「皇帝ペンギン1号とビーストファングは影山零治が考案した必殺技だ」

鬼道は御坂達に影山零治のことを話した

影山零治、かつて鬼道がプレイしていた帝国学園の総帥。「勝利こそ全て」を自負してをりそのためなら
相手チームを妨害し潰すことや自分の選手を犠牲してまでそれほど勝利に固執する男である。

その影山が考案した技が皇帝ペンギン1号とビーストファング、皇帝ペンギン1号は恐ろしい威力持つ反面

全身の筋肉が悲鳴をあげ激痛が走り、体にかかる負担があまりにも大きいため帝国学園では禁断の技として封印された。

鬼道「あの技打つのは一試合付き2回が限界、三回目は・・」

御坂「・・・」

鬼道「二度とサッカーができない体になる」

御坂「!!」

佐天「ひどい・・」

初春「ひどすぎます」

黒子「その影山とうゆうヤツもゆるしませんは!!」

黒子「ではそのビーストファングも・・」

鬼道「ああ、使うたびに体を破壊する技だ」

そしてハーフタイムは終了

ピー！！

角馬「さー後半戦が始まりました」

後半戦が開始されたさっきほどでリズムをつかんだチームゼロはすましい攻撃してきた

ナンバー9「ワープドライブ」

ナンバー9はワープホールつくりその穴に入り一之瀬の後ろに出現した

一之瀬「なに！？」

土門「まかせろ一之瀬」

土門「ボルケイノカット！！」

土門の鋭い回し蹴りが地面を火山が噴火しナンバー9を止めた

土門「鬼道！！」

角馬「土門、鬼道にパスをした」

土門からパスをうけた鬼道は上がっていった

鬼道「吹雪！・・」

しかし

ナンバー４「いかさん、グラビティション！！」

鬼道は重力は体がしずんでそのスキにボールが奪われた

鬼道「しまった」

そのボールはナンバー１１に渡された

角馬「ボールはナンバー１１にわたされた！！」

木暮「いかせるか、せんぷ・・」

すると

ポーン

木暮「え！？」

ナンバー１１「ジャッジスルー！！」

ドカーン

木暮「うわー！！」

春奈「木暮くん！！」

ナンバー１１はなんと木暮の腹辺りにボールを渡しそしてボールごと木暮を蹴り飛ばした。

ピッピー

円堂「大丈夫か木暮！！」

木暮「だ、大丈夫・・」

円堂「おまえ！！なんてことするんだ！！」

ナンバー１１「フン！！」

ナンバー１１は鼻で笑った

御坂「なんなのアイツ！！ぶつけておいて誤りもしないんて！！」

御坂の頭から電流がでた

黒子「お、お姉さま落ち着いてください」

角馬「さー雷門のボールから試合再開！！」

ピー

ボールは塔子にパスされるが

塔子「何！」

ナンバー１０がカットした

木暮「今度こそいかせるか」

ナンバー１０「ジャッジスルー２！！」

また木暮に腹辺りにパスするが今度は連続キックそしてそのまま蹴り上げながら蹴り払った

円堂「木暮！！」

円堂「木暮、大丈夫か！？」

木暮「キャプテン・・」

木暮は気絶した

円堂「くっ　目金入ってくれ」

目金「は・・・・はい！！」

角馬「負傷した木暮に変わり目金が入ります」

しかし

目金「ぎゃー」

目金もジャッジスルーの餌食になってしまった

リカ「くそー、こうなったらウチがＤＦにはいる！！」

しかし

御坂「私が行くは！！」

リカ「な、ないいっとんねん！！」

黒子「お姉さま！？」

御坂「あんなヤツらに好き勝手させてたまるもんですか！！　私も協力するは！！」

常盤台の超電磁砲（後書き）

学園都市の第3位が参戦

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6800m/

イナズマイレブン　驚愕の学園都市

2010年12月11日14時27分発行